

戦前・南洋の日本人町を歩く

第一部 シンガポール〜マレー半島(上)

作家

太田尚樹

●おおた・なおき 1941年生まれ。東海大学名誉教授（スペイン文明史、比較文明論）。スペインに関する著作から昭和史を発掘するノンフィクションまで、幅広い執筆を続ける。著書に『コルドバ歳時記への旅』など。

東南アジアの国々の、雑然とした市場のなかを歩くのが好きである。路上に山と積まれたバナナ、パイヤ、マンゴー、ドリアンのほかに、名も知らない南洋の果物――。

さつきまで足を縛られてキョトンとした視線を周辺に送っていたニワトリが、露店のオバサンの振るう牛刀のように頑丈な包丁の下で、瞬く間に原型を失っていく。

売り子の大きな掛け声や客とのやり取り、子供の泣き声、自らの身に降りかかろうとする危険を察知したのか、籠のなかのアヒルがガアガアと騒ぎ出す。そこには生活の音と匂いがすべて凝縮されている。

南洋の空の下には、飾り気のない、本音の姿をあらわにした伝統社会の生活空間が根付いている。

南洋進出の尖兵たち

鎖国が解けて明治の世が明けると、南洋各地にかけがえのない人生をかけた日本人たちが次々と出現した。二五十年もの間、鎖国で閉塞していた日本には、外に向けたエネルギーが、溜まっていたからである。近代へ向かう時代の変革の胎動は、志ある人々を着実に突き動かした。曰く、海外雄飛。

そのなかに明治新政府に希望をもてないまま禄を失い、刀を算盤そろばんにもち替えた侍、豊富な南方の資源を商って一獲千金を夢見る商人、伝統の技を新天地で思い切り腕を振るってみたい職人たちがいた。明治政府にとっても、彼らは資源保有と貿易拡大の先遣部隊であ

り、情報収集の協力者でもあった。

だがその一方で、貧しさから家族を救うために、異国に落ちて行く娘たちもいた。「娘子軍」「カラユキさん」といわれる娘たちである。彼女らが故郷に送る金は、日本にとっても貴重な外貨だったのだ。

月日流れて今日、椰子の木陰にひっそりと眠る彼女たちの墓石の何と多いことか。名前と出身地、享年を刻んだ墓石があれば、いいほうである。

南洋で財をなした証しに、とてつもなく大きな自分の墓を作らせた人たちにはばかってか、離れた所に小さな目印の石が碁盤の目のように並んでいる無縁墓地も、シンガポールに、メダン、ジョホールバル、マラッカはじめ、南洋のいたる所で見えた。

そこで気が付いたのは、男たちの出身地がまちまちなのに比べ、女性たちは長崎、熊本の人が多いことだった。長崎、熊本は港に近いただけでなく、南蛮渡来の切支丹を受け入れたように、南洋的精神風土があったのではないか。幸せは南の島に宿ると信じ、冒険心、一旗揚げたい野望に抗しきれなくなり、南に漕ぎ出した人々である。だが自分の名前さえ刻まれていない、ただこの地に魂が眠っている事実を、小さく訴えている日本娘たちもいる。

その人々が南十字星の下の椰子の木陰に刻み、没していった足跡の姿形は変わっていても、生きた証しの残影を求めて昔を偲び、対話することに、静かな感動を覚えるのは何ゆえか。そこには同胞たちが残していた喜びや悲しみ、言い尽くせない情念が刻印されているからに違いない。

そこで戦前の南洋日本人町探索の旅は、シンガポールからはじまることになる。

最初に定住した漂流者

近年、シンガポール日本人会が編纂した『戦前シンガポールの日本人社会』という写真集がある。われわれの同胞がこの地に刻んだ、たしかな生の時空間の記録である。

これによると、シンガポールに定住した最初の日本人は、愛知県知多郡美浜町出身の「音吉」である。身分は侍でないから苗字はない。彼の数奇な運命はジョン万次郎のそれに似ている。十四歳の折、乗っていた廻船が嵐に遭い、仲間の二人と共に漂流するが、着いたところは、米国西海岸ワシントン州ケープ・アラバ。その後、英国船に拾われてロンドンに渡り、米国や